

親鸞仏教センター通信

 2006.
March

2006年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第17号

大悲による「独尊子」

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

「朝な朝な、仏とともに起き、夕な夕な、仏とともに臥す」(『清沢満之全集』第8巻402頁、岩波書店〈筆者が適宜読みやすく表記。以下、同じ〉)。これは『安心決定鈔』(『真宗聖典』953頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉)にある有名な言葉である。この言葉を清沢満之は『臘扇記』に記したのち、「仏とは何ぞや」と自問し、続いて『臨済録』の言葉を記す。

一無為の真人あって、二六時中、爾の面門より出入す。

と(無為は、元の『臨済録』では無位)。続いて、「無為の真人とは、何者か」と自問を繰り返し、仏を恥ずかしめず、真人を忘れない者は独尊子である。

と自答する。そして、「独尊子は、無畏に住し、不動に安んずる者である」という。

「独尊」とは、釈尊の伝記で誕生と同時に宣言として伝えられる「天上天下唯我独尊」に由来するものであろう。してみると、仏とともに起居するということは、自己の心身に「独尊」の信念が当来し、「無畏と不動」の安住が与えられることであるというのであろうかと思う。そしてこの信念は、決して自力の仏性に立つもののことではなく、他力信心の人の生活内容なのだということを語っている。

仏法をいただくということが、具体的にどういう功德を私たちに与えるのかというなら、例えば親鸞聖人は「必ず現生に十種の益を獲る」(『教行信証』『信巻』『聖典』240頁)と言われているし、その他にもさまざまな利益を数え上げられるかもしれない。満之自身も、信仰の諸徳として、精進の心・忍辱の心・不諍の心というようなことを語っていたこともある。

だがここで満之は、「無畏」と「不動」の二つを押さえている。畏れについては、五つの畏れを『十住毘婆沙論』では出している。「不活・死・悪道・大衆威徳・悪名」の畏れである。こういう事態への畏れは、人間が生きている限り逃れられない不安に根ざすものであろう。そして、生活する私たちには、時代や社会の状況が、あたかも運命のように襲ってくる。それによって、大きく揺さぶられ投げ出されて、自分自身などはどこかへ行ってしまうのである。しかし、そういう状況のただなかでも、「動かざること山のごとし」といわれるような仏陀の志願に包まれ支えられるという宗教的信念のあり様を、「朝に夕に仏とともに在る」というのだと、了解されたのではないだろうか。

自力でつくる信念ではなく、攝取不捨の大悲を根拠とすることによる大安心、「無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」(「正像末和讃」『聖典』503頁)の心境を表されたのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—^{じよくせ}濁世を超えて、濁世に立つ—」 この身は本願のはたらく場所 —^い往くのも^{かえ}還るのも本願力—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第42回（第42回のシンポジウムは、本紙12頁を参照ください）から第44回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第43回と第44回は、「莊嚴菩薩功德成就」の第一首について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第41回の問題提起（「二種回向〈往相回向と還相回向〉」）からその一部を紹介する。

（越部良一）

■ 往還の対面

往相^{おうそう}の回向というのは、私どもの煩惱の生活を突破して、大涅槃の果を得しめる。還相^{げんそう}の回向は、逆に真実証の側からはたらいて、普賢^{ふげん}の徳を修すると、こういうふう^{あき}に親鸞は顕らかにしてくる（『教行信証』『証卷』に曇鸞の『浄土論註』を引文。『真宗聖典』286頁、東本願寺出版部を参照）。大涅槃を得るといこと自身が謎みたいなものでしょう。その上、大涅槃から還^{かえ}ってくる。これは謎のまた謎のようなものです。これを、死んで浄土に往って、還ってくるのだと解釈してしまうのは、一つの解釈であって、回向は如来の大悲のはたらきを語るわけだから、そうした考えを少し変えなければいけないのではないかと思いますのです。

曾我量深先生は、どういうふう^{あき}にこれをいただかれたかという、往相還相の回向は、往還の対面だというふう^{あき}に言ったのです。この考え方のヒントは、もう60年も前ですか、進駐軍が

入ってきたときに、それまで日本人は左側通行であったのですが、右側通行にしろと。それで、「人は右、車は左」というような標語を作った。人は車と対面して歩けば危なくない。その標語を曾我先生は、ああ、これが往相の回向、還相の回向の考え方だと。つまり、往かしめるはたらき、往相と、還らしめるはたらき、還相とは、われわれの上で出^で遇^あうのだと。われわれに往相の回向がはたらくと、われわれに教えてくださる還相のはたらきが来て、ぶつかる。念々に往還がぶつかる場所に、われわれは生きる。往還の対面ということをおっしゃったのです。

これは、一つの考え方です。単に往相の結果、還ってくるというように、自分が往ったり来たりするのではない。自分は往くのみである。親鸞聖人という方は、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」（『歎異抄』同628頁）という言葉もありますけれど、自分は師匠にはならず、凡夫として求め続ける。如来の教えに遇っていくのみである。それでは、自分だけが求め、自分だけがたすかって、他の人を見捨てていったかという、決してそうではない。向かい合って教えてくださる以上に、われわれに教えを与えてくださった。つまり、「後ろ姿が人を育てる」と、よく言いますよね。つい、われわれは、前向きになりたがる。「お前はだめだ」とやりたがる。だけど本当は、人はそれでは育たない。人をつぶしてしまう。自分は求める。求めると、人も「ああ、そうだな」と求めてくださる。その求めさせるはたらきは、本願力である。人が引っぱるのではない。人を生か

している真理が、他の人も生かしていく。

曾我先生が言われるように、自分は往相の回向をいただければ、還相の回向に値遇する。還相の回向に出遇っていくのだと。曾我先生は一貫して、真実証から教えが出てくるのだと。如来の教えは「証」から、「さとり」から出てくる言葉、大涅槃の果から出てくる言葉だから、われわれを育てることができるのだとおっしゃった。だから、本当にはたらくものは、還相の回向である。われわれは、それに出遇っていく力を与えられる。出遇っていく力が、往相の回向である。往還の回向は対面であると。これは曾我先生の代表的な考え方の一つです。

金子大榮先生の考え方は、親鸞が往ったように、みんな往くのだと。往かしめるはたらきが往相の回向である。その後ろ姿が、還相の回向だと。こういう考え方です。後から往く人間は、往相の回向の、後ろ姿の還相の回向に出遇うと。これも、わかったような、わからないような話ですけども、わかると言えばわかる。

■ 本願力のサンドイッチ

人間は真理を聞いていけばいいというのが、親鸞の姿勢です。その道を徹底した点が、すごいと思うのです。自ら凡夫だと言いながら、すごい凡夫です。徹底して凡夫なわけです。われわれは、すぐに凡夫を忘れる。忘れる凡夫ほど始末に負えないものはない。凡夫であることを忘れないということは、念仏の智慧なのです。

だから、本願力が往かしめるのであって、往くのも還るのも本願力なのです。凡夫は行きもせず、還りもせず、ここに居るだけです。ここに居る人間に永劫の信心が与えられる。そこに大涅槃が来ると。つまり、はたらいている場所は、私にはたらいている。往還二回向がはたらいている。だから、私はそれを信じていくことができる。「弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ」（「高僧和讃」同492頁）と。信心も念仏もともに、如来の往相還相の回向によって与えられるのだと。与えられる場所は、

この凡夫である。だから、自分でする必要はなくて、本願力がはたらいている。こういう信心が、他力の信心だろうと思うのです。

サンドイッチというものがありますけれど、あるいは、どら焼きね。中のあんこの美味しいどら焼き、上下で挟むでしょう。どら焼きのあんこを美味しく感じさせるのは、上下の皮である。皮のまずいどら焼きなど食べられたものではない。上下の皮があって、見たところもどら焼き、食べてみてもそう。まあ、比喻ですよ。上の皮と下の皮とに分かれて、中を挟んでいるように、本当は一つのはたらきが二つに分かれている。本願力のサンドイッチが二種の回向となっている。そういうイメージで考えると、少しは考えやすいかなと思うのです。

われわれは自分で生きていると思っていますけれど、実は大地に支えられ、空気があるで生きているわけです。下に大地があり、上に空気がある。だからサンドイッチでしょう。われわれは、俺が自分で生きているのだ、俺が教えてやっているのだと思いたいから、とにかく愚かな上に愚かなのですね。われわれは、そんなふうに我執で考えているけれども、本当は、大きなはたらきに包まれて生きているわけでしょう。私は、そのはたらく場所になる。誰でもみんな、その場所になる。それは誰のものにもならない、誰の持ち物にもならない。そういうものを開いて教えてくださったことが、親鸞という人の大きなお仕事ではなかったのかと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2006年3月27日(月)午後6時30分～9時
4月は休講となります。

5月23日(火)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

現代と親鸞の研究会・第18回

朝鮮史から見た日本

朝鮮史研究会会員 岡 百合子



岡 百合子 氏

2005年4月6日、東京ガーデンパレス（文京区）において、「朝鮮史から見た日本」をテーマに、朝鮮史研究会会員の岡百合子氏をお招きして、「現代と親鸞の研究会」を開催した。朝鮮史、特に日本との関係史をとおして、われわれ日本人のもつ問題点や新しい視点について、語っていただいた。ここにその一部を紹介する。

（本多雅人）

■ 朝鮮と私のかかわり

私の過去の経験から言うと、朝鮮史をやるとき近現代史だけをとりだすと、日本がやった、朝鮮がやられたという話にばかりなってしまう。ですから、古代からきちんと学んでいかねばならないと思います。

当初（1970年代）、私が行^{おこな}っていた朝鮮史の授業は見事に失敗しました。日本の36年間における朝鮮の植民地支配について、日本の悪逆非道なことばかりを扱っていました。それは生徒にとって逆効果だったのです。これは私の学校だけのことでなく、当時の全国の中・高校生のアンケートの結果ですが、「貧しい」とか「汚い」とか、「いつまでも過去の問題をグジグジ言って、しつこくて嫌いだ」というようなイメージで、南北に関係なく、朝鮮を嫌いだという中・高校生が非常に多かったわけです。

そのような経験を通して、80年代に入ってから、岩崎書店で子ども向けの『世界万国史』というシリーズ（20ヵ国・20冊）を出すことにな

り、私が朝鮮史を書くことになりました。それがきっかけとなって退職後、公民館などでの朝鮮史講座への依頼が舞い込むようになりました。私は教員でいたとき、勉強の嫌いな子に歴史を教えるということで、できるだけ話をやさしく、消化しやすいようにするということが何十年も努力してきました。それで今度は、朝鮮史研究者と、日本人でありながら隣の国のことを何も知らないふつうの人との間に立って、朝鮮史を一般に敷衍^{ふえん}する仕事に自分の役割を見いだそうと思うようになりました。現在の日本人の朝鮮に対する見方は、「韓流ブーム」という現象もあるように、大分イメージが変わったとは思いますが。しかし、最近再び、竹島問題、教科書問題、靖国問題など、韓日の間が厳しくなりました。でも、これが本来の姿だろうとも思います。

いずれにしても「朝鮮史から見た日本」を討論するには、朝鮮史を古代からきちんと学んで、朝鮮と日本との間にどういう関わりがあったのかを知らなければ、正しい答えは出ないと思っています。

■ 歴史を考える姿勢

次に、私自身の朝鮮史を考える姿勢についてお話しします。『朝鮮・韓国の歴史』を書きながら、実は釈然としない思いがありました。ちょうどこの本が出る少し前、「東アジアシンポジウム」という中国、韓国、北朝鮮、日本の学者たちによる歴史のシンポジウムが開かれ、その内容をまとめた本が、比較史・比較歴史教育研究会編『アジアの「近代」と歴史教育一統・自国史と世界史一』（未来社）として出ました。

そのなかに、私は「朝鮮史とのかかわりの中で」という文章を書きました。そこで言いたかったことは、私は日本人なのに、朝鮮ナショナリズムに身を寄せて『朝鮮・韓国の歴史』を書いた。例えば、伊藤博文と伊藤を射殺した安重根^{アン・ジョンゲン}の関係について、「伊藤博文はけしからん」「安重根は英雄だ」ということで書いたわけです。私は、まるで自分が朝鮮人であるかのように、「朝鮮万歳」ということで本を書いたのです。しかし、それでいいのだろうかという思いがあって、ナショナリズムについての思いを述べました。韓国のほうでもいま、ナショナリズムについて新しい動きが起こっていますね。韓国ではこれまで国内がバタバタしてくると、必ず「反日」ということで国内世論を統一しようとしてきました。それを一番使ったのが、朴正熙^{パク・チンヒ}の時代でした。しかし、そういう「反日」だけでいいのだろうかという反省が、韓国の、若手の学者のなかから出てきているようです。

最近、韓洪九^{ハンホング}という新しい世代の学者が、『韓国現代史』（平凡社）という非常にいい本を出しました。韓さんは、朝鮮戦争前後の民間人虐殺の真相究明や、ベトナム戦争に行った韓国人が、ベトナム人を大虐殺したことを掘り起こすなどの運動もしている活動家で、第一線にいる大学教授です。その韓さんが安重根と伊藤博文についてふれています。韓国では安重根は英雄です。そして日本では、伊藤博文は千円札になったぐらいですから、愛国者で、明治政府の立て役者、元勲であったことは確かです。

韓国の人は伊藤博文を仇敵^{きゆうてき}として、彼を殺した安重根を英雄と言います。日本人は伊藤博文を元勲として、安重根はテロリストだと言います。韓さんは、その溝を埋める以外に日韓の将来はないのでは、ということを言外に示唆しています。それを超える道はどこにあるか。とても難しい問題ですが、私はその一つは“近代”を考えることにあると思っています。伊藤博文がなぜ朝鮮を支配したかという、これは日本の近代という問題にあります。日本が列強^{りきやう}に伍して生きていく。中国や朝鮮のような惨め

な国にならないためには、朝鮮、中国を植民地にする以外にないという、福沢諭吉らがとなえた方針を日本政府はとったのです。

伊藤博文はその方針を率先して一生懸命やった人であり、安重根はそれを「けしからん」と言って韓国の独立のために伊藤を暗殺した人です。そうすると、その両方が手を結び合うためには、近代とはいったい何だったのかを、まず明らかにしなければなりません。脱亜入欧^{だつあ にゆうおう}という日本のやり方、列強の植民地にならないために、アジアの国々を植民地にする、そんな方法しかなかったのか。朝鮮、中国、日本が手を結んで、欧米列強、ロシアも含めて、それらの外圧と抗するという道は果たしてなかったのか。これからの世界、そして東アジアの未来のことを考えるとき、中国、韓国、北朝鮮等と日本がいっしょになっていく方向を探る以外に、溝を埋める道はないのではないか、ということがいま問われているのだと思います。

(文責：親鸞仏教センター)

※岡 百合子氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第10号（2006年6月1日号）に掲載予定です。

岡 百合子（おか ゆりこ）朝鮮史研究会会員

1931年東京都生まれ。お茶の水女子大学史学科卒業。1954年から86年まで、東京都の公立中学と高校の社会科教師をつとめる。夫は作家の高史明氏。歴史教育者協議会会員。著書に『中・高校生のための朝鮮・韓国の歴史』（平凡社ライブラリー）、『白い道をゆく旅—私の戦後史』（人文書院）、『いのちの行方』（高史明氏共著、径書房）、『市民がつくる日本・コリア交流の歴史』（共編著、高麗博物館）など多数。また、『アンジャリ』第4号に「朝鮮史と日本史を貫くもの」（親鸞仏教センター）を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

そうらわじものを。

また、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひと、ただおなじことなり」と。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とこそ、聖人はおおせそうらいしに、

当時は後世者ぶりして、よからんものばかり念仏もうすべきように、あるいは道場にはりぶみをして、なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからず、なんどということ、ひとえに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚飯をいただけるものか。願にほこりてつらんつみも、宿業のもよおすゆえなり。

さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ。

『唯信抄』にも、「弥陀いばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すぐわがたしとおもふべき」とそうろうぞかし。本願にほこることのあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しぬべきことにてそうらえ。

おおよそ、悪業煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもいもなくてよかるべきに、煩惱を断じなば、すなわち仏になり、仏のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましますさん。

本願ほこりといましまるるひとびとも、煩惱不浄、具足せられてこそそうろうげなれ。それは願にほこらるるにあらずや。いかなる悪を、本願ほこりという、いかなる悪か、ほこらぬにてそうろうべきぞや。かえりて、こころおさなきことか。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

もするものだ」と語られたのだ。

このころは、自分こそが真の念仏者だというような振舞いをして、善人だけが念仏することができるようにならねえ、例えば、念仏の道場に、禁止事項を書いた紙を貼り、「〇〇のことはしたものは、道場に入ってはならない」などということは、ただただ外見には真面目な念仏の行者を装って、内心には虚偽をいだいているものではないのか。たとえ、本願に甘えて犯した罪であっても、それは人間には知り得ないほど深い必然性の作用なのである。そうであれば、善いことも、悪いことも、思いを超えた必然性を受け入れて、ただただ、本願にすべてをまかせて立ち上がるこそが、他力の教えではないであらうか。

『唯信抄』にも、「私のように罪深い身が救われるはずがないと考えてしまうのは、阿弥陀の救済の力が、どの程度のものだと考えてのことだろうか」と言われている。阿弥陀の本願に甘えることがあってこそ、絶対他力にすべてをおまかせする信心も定まってくるのである。そもそも、悪業や煩惱を完全に断ち切つてから、本願を信ずるということであれば、本願に甘えることもなくてよいのであろう。しかし、煩惱を断ち切つたならば、それは仏に成つたということであり、仏のためには、どのようにしても衆生を救いたいという無上の本願も無意味だということになるであらう。

「本願ほこり」はよくないと批判している人びとも、実は煩惱を抱えておられることであらう。それはそのまま、本願に甘えているということではないのだろうか。どのような悪を、本願に甘える「本願ほこり」というのか、またどのような悪が、本願に甘えないというのであろうか。本願ほこりでは往生できないという主張は、実に幼稚な考えではないだろうか。

語 註

①「御消息」『親鸞聖人御消息集』（広本）第一通（『真宗聖典』五六一頁参照）を指す。

②「持戒持律」仏教徒の守るべき規範（戒と律）を保つこと。代表的な規範として五戒（生き物を殺さない・盗みをしなない・嘘をつかない等）がある。

③「生死」第十一条の語註（通信）第十一号を参照。

④「業報」第七條の語註（通信）第九号を参照。

⑤「唯信抄」聖覚（一一六七—一二三五）の著。法然門下であり、親鸞の兄弟子。親鸞は、この書を門弟に対してたびたび勧め、この書の注釈書として「唯信抄文意」を著している。

⑥「五劫思惟の願」阿弥陀仏が菩薩としてはたらく姿を、法蔵菩薩という。法蔵菩薩は、五劫という永遠の時間をかけて、一切衆生を救う願いを発した。その願いのことは「仏説無量寿経」に説かれていて、

⑦「煩惱不浄」煩惱と不浄は、同義語である。「教行信証」「真仏土巻」には「心も有漏なるを名づけて不浄と曰う」（涅槃経）「徳王品」からの引用（『真宗聖典』三〇七頁）とある。「有漏」は煩惱の異名。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

私の二冊

(高 海史)

『心の専門家はいるかい』

小沢牧子（洋泉社 新書Y）

著者・小沢牧子は、一九六〇年、日本の臨床心理学の黎明期から研究に携わり、現在は、臨床心理学そのものを批判する著述家として活動している。

著者は、『心の専門家』の氾濫と、それを喧伝するマスコミ、そしてそれに浸食されていく世の中への強い気がかりから、本書を執筆したという。

「多くの場合、患者・クライエントは、自分の生活の問題を心の問題に置き換えるカウンセリングの操作を受け入れる。（中略）混沌とした悩みや苦しみを自分の心の問題に集約させる技法を受け入れて、自己反省的に内面を見つめていく成り行きとなりやすいのである」と、著者はカウンセリングがもつ構造的な欠点を指摘する。

そして、「専門家依存がわたしたちにとって安心な道であるとは考えられない」「たまたま、まわりで縁をもった人びととつながりを広め、深めて手問ひまをかけるが、問題もあつて当然」の毎日のなかで考え、模索し、知恵を積み重ねる道を見失いたくないものだ」と声高に力説する。心の悩みを、どういう視点（個人・社会）で捉えたらよいのか、考えさせられる一冊である。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十三条は、「本願ほこり」の人びとを批判している。「本願ほこり」とは、悪事を犯したものをたすける本願があるのだから、意図的に悪事を犯そうとする人びとのことである。

ところが、『歎異抄』著者の批判の焦点はそこにはない。むしろ、「本願ほこり」を批判している人びとにこそ焦点を当てている。「本願ほこり」を「悪人」とし、「本願ほこりを批判するひと」を「善人」と考えれば、「悪人」ではなく「善人」に批判の力点がある。これは私たちを戸惑わせる。なぜなら、私たちの発想が「善人」と同化していたことが炙り出されたからである。「善人の毒」のほうに「悪人の毒」以上に深刻だ、と『歎異抄』の著者は見ている。悪人の毒は目立つが、善人の毒は目立たない。毒は常に「善」を装って浸食するからである。（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十三条〉その2

原文

そのかみ邪見^{じやくけん}におちたるひとあつて、悪をつくりたるものを、たすけんという願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業^{ごう}とすべきよしをいいて、ようように、あしざまなることのきこえそうらいしとき、御消息に、「くすりあればとて、毒をこのむべからず」と、あそばされてそうろうは、かの邪執をやめんがためなり。

まったく、悪は往生のさわりたるべしとはあらず。①「持戒持律にてのみ本願を信すべくは、われらいかでか生^{しょうじ}死をはなるべきや」と。かかるあさましき身も、本願にあいたてまつりてこそ、げにほこれそうらえ。さればとて、身にそなえざらん悪業は、よもつくられ

現代語訳

以前、親鸞聖人のおられたころ、間違った考えに陥ったひとがあつて、「悪を犯したものを、たすけようという本願なのだから、意識的に、好んで悪を犯して、往生のための条件とするのだ」と言つて、さまたちに悪いわざが聞こえてきたとき、聖人がお手紙に「業があるからといって、あえて毒を好んではならない」と、お書きになったわけは、その誤った考えを正すためである。

そう言つたからといって、悪事が往生の障害であるというわけではない。「もし、戒律をたもつことによつてのみ、本願を信じられるのであれば、私たちは、どうして迷ひ苦しみの尽きない生活を離れることが可能であろうか」とおっしゃつた。このように愚かな身であつても、阿弥陀の本願に出遇うことができてこそ、ほんとうの自信と自尊心とを得ることができるのである。そうであるからといって、身に悪事を犯す条件が備わらなければ、自分勝手に悪事などは犯せないものだ。

また、親鸞聖人は、「海川に網を引き、釣りなどの漁業をして暮らすものも、野山に鹿・猪・鳥を捕つていのちをつなぐものも、商いをしたり、田畠を耕して生きるものも、まったく同じことである。このように自己のいのちの底深からよおしてくる条件が与えられるならば、どのような行為を

親鸞仏教センターの動き
(2005.12~2006.2) 抄出

■2005年

12・1 情報誌「E.C.E.」第10号、研究誌「現代と親鸞」第9号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第16号を発行。
親鸞聖人ご命日のついで

12・9

第3回英訳「教行信証」再版編集会議
第172回研究会議（研究・交流・出版の協議と企画）。以降、14回の会議を開催。
第1回テーマ別研究交流会「サイコシネシスの人間観」内科医、聖路加国際病院附属クリニック・予防医療センター長・平松園枝氏（千代田区・東京国際フォーラム）

12・16

第43回「親鸞思想の解明」公開連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

12・20

第6回英訳「教行信証」クロツサリ研究会

12・22

第63回「聖典」の試訳「歎異抄」研究会
第70回英訳「教行信証」研究会

12・26

第40回清沢満之研究会

12・27

親鸞仏教センター報恩講

■2006年

1・13 親鸞聖人ご命日のついで
第41回清沢満之研究会「清沢満之における内在と超越」東京大学大学院教授・竹内整一氏（文京区・東京ガーデンパレス）

1・17

第44回「親鸞思想の解明」公開連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

2・1

第26回現代と親鸞の研究会「医療と仏教」佐藤第二病院医師・田畑正久氏（文京区・東京ガーデンパレス）

2・8

親鸞仏教センター研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く一釈尊・法然・親鸞の世界」（今なまバダ（法句経）を読む）
①2/8 ②2/16 ③2/22 ④3/1（文京区・東京大学仏教青年会館）

2・10

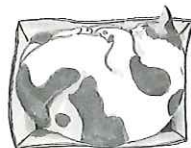
第2回テーマ別研究交流会「自力と他力」意志について（平松園枝氏（千代田区・東京国際フォーラム）

3・1

機関紙「親鸞仏教センター通信」第17号を発行。

●『歎異抄』研究会報告●

宗教原語を現代語に翻訳する 意義と諸問題



親鸞仏教センター嘱託研究員 武田 定光

聖典の試訳『歎異抄』研究会では、2005年5月27日、東京大学名誉教授の脇本平也先生をお招きし、「宗教原語を現代語に翻訳する意義と諸問題」というテーマのもとに、われわれの研究活動へのアドバイスをいただいた。ここにその一部を紹介し、報告とする。



■ 伝統的文化複合としての宗教

脇本平也先生は「宗教は文化複合」だと押さえられ、

教えとか思想は、それだけが独立してあるわけではなくて、その背後には「儀礼」というものがあります。儀礼という言葉にも、広い意味が含まれるわけです。子どものときに仏さまの花の水をかけて手が冷たかったということも、もちろん入るわけです。それから、お勤め（勤行）をすることもあります。さらに、自分の肉体や精神を鍛え上げていく修行もある。そのなかに坐禅もあれば、念仏（^{とら}念）を称えるものもあります。もう一つ、「教団」ということもあります。組織的社会集団の側面です。儀礼や修行をやっていく仲間があって、お互いが切磋琢磨するとか、お互いが批判し合うということをとおして、教えが伝わるといこともあります。

宗教学では、「宗教を成立させている構成的なエレメント（要素）は何か」ということを問題にしたりします。そういう要素が非常に複雑に絡み合った相関関係のなかで、思想とか教えというものも形成され、



脇本平也 氏

展開もしていくわけです。
と述べられている。

■ 記述言語と表現言語

さらにキリスト教神学者の八木誠一氏の論文（曹洞宗総合研究センター宗学研究部門発行『宗学と現代』第6号）から、「記述言語と表現言語」の違いについて語られた。

「記述言語」というのは、客観的に事実を記述していく科学の言葉のようなものを言います。「表現言語」というのは、心のなかの出来事を表現するものです。文学とか小説、詩、民話、神話、あるいは宗教において使われるものです。ですから、科学の言葉は記述言語であり、宗教の言葉は表現言語だと区別されます。

さらに、脇本先生独自の三つの類型を提示され、

宗教学の立場から、霊系（霊の存在を前提とする宗教観）・命系（日本古代の宗教観）・理系（記述言語としての宗教観）の比重の割合や軸足はどこにあるか、ということで宗教を見ていくのです。

と押さえられた。つまり、霊系・命系・理系のバランスで宗教は成り立っているというのである。さらに、われわれの研究会への具体的提言もいただいた。

■ 理性的な翻訳から、感性的な翻訳へ

現代語に翻訳するという場合、まず目的があります。「誰のためにするのか」「何のためにあるのか」ということです。それについては、すでに本紙『創刊号』（5頁）で、「現代人がたやすく教えの言葉に親しめるために」という目的が掲げられています。そして、「教えの言葉（原典）にふれる契機にしたい」（同頁）と、この二つで問題は要を尽くしていると思います。そのなかでいつも問題になるのは、「誰のためか」ということです。この場合、私どもが本を書いたり、論文を書いたりするときに、出版社の方や編集者からよく注文を受けるのは、「大学の一般教養課程（1、2年生）のレベルのひとを読者として頭に置いて書いてほしい」と言われるわけです。翻訳という場合も、読者として想定されているのは、やはり、大学の一般教養課程のレベルの、現代の若い人びとということになるのではないかと思います。

ところが、親鸞仏教センターの方たちは、「現代の若いひとたちは、神話というようなものとは無関係である」と考えているのではないのでしょうか。神話とは無縁な「科学人」とか「哲学者」のようなひとたちを、読者として前提してしまっている。そのために、科学の目で見ても納得できるように言葉を変えていこうという方向づけになっているのではないのでしょうか。

本紙の『歎異抄』試訳を眺めてみますと、例えば、「往生」という言葉が、「新しい生活を獲得できる」（第1条・第2号・5頁）とか、「真実の自己になる」（第3条・第5号・5頁）という現代語訳になっています。確かにわかるのですが、果たし

てそういう翻訳でよいのだろうかと思います。何か迫力に欠ける感じです。

「往生」とは、「真実の自己」ということと同時に、やはり「この穢土^{みよと}から解放されて浄土に往生する」ことです。浄土とは闇の世界ではなく、光の世界です。荒れ狂う海ではなくて、穏やかで静かで、平和な海です。伽陵頻伽^{かりょうびんが}の声が聞こえて、よい香りが漂うという、神話的・感性的な浄土ということも見逃してはならないでしょう。そういうアーカイック（古風）なイメージは、非常に強い喚起力をもっていて、それが一般の民衆には訴えるわけです。

確かに合理化し、脱神話化していくという翻訳の努力も大切だけれども、その文化のなかに生きている、言ってみれば深層心理のようところに潜んだアーケタイプ（原型的）なイメージへ訴えるという方向も頭に入れておいてもいいのではないのでしょうか。

と、研究会のあり方についてご提言いただいた。

共同作業で、翻訳の議論をしているときには、どうしても「理性」偏重になりやすい。つまり、「誰にでもわかりやすい」とか、「理性的に非の打ち所がない」という方向に傾きやすい。もっと感性を解放し、理性のガードを下げていくトレーニングをしなければならないと教えられた。

※協本平也氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第10号（2006年6月1日号）に掲載予定です。

協本 平也（わきもと つねや）東京大学名誉教授、国際宗教研究所理事

1921年、岡山県生まれ。1944年、東京大学文学部宗教学宗教史学科卒業。立教大学助教授、東京大学助教授を経て、1970年、東京大学教授に就任。1981年、退官。著書に『評伝 清沢満之』（法蔵館）、『宗教学入門』（講談社）、『宗教体験への接近』『宗教思想と言葉』『祀りへのまなざし』（共編著、以上、東京大学出版会）、『死の比較宗教学』（岩波書店）など多数。また、『アンジャリ』第7号（親鸞仏教センター）に「清沢満之の生涯に学ぶ」を執筆いただいている。

● 清沢満之研究会報告 ④ ●

清沢の人間学

—有限心霊から無限心霊へ—

親鸞仏教センター研究員 伊 東 恵 深



本誌第15号で報告のとおり、清沢満之研究会では、2004年5月から「他力門哲学骸骨試稿」（以下、「試稿」と略記）を月1回のペースで読み進めている。また、通常の研究会に加え、2005年6月17日には「近代親鸞教学の系譜—清沢満之と曾我量深—」と題して、新潟大学副学長の深澤助雄先生をお招きし、講義をいただいた。

今号では、「試稿」の「〔12〕心霊」から「〔20〕汎神論万有開展論」までの研究内容について、その一端を紹介し、第2回（通算4回）報告とする（出典は『清沢満之全集』〈岩波書店〉とし、巻数と頁数を記す）。



■ 心霊の開発

「〔12〕心霊」の考察は、前項「〔11〕補訂」の最後の一文「（次ニ心霊開発ニ先チ心霊ヲ論ス）」（第2巻55頁）を受けて展開する。清沢はここまで、有限と無限が同一体・表裏一体の関係であるということ、「万有の転化」という活動を通して推究してきたのであるが、この点を「心霊の開発」に確かめていこうとするのである。

清沢は、まず「心霊」について、「吾人各自ノ如キモノナリ」（同巻56頁）と端的に押さえるが、欄外の白筆の図にあるように、「心」もしくは「意識」を意味する言葉であると思われる。清沢は、心理学的観点から、心霊に受動的（知的）側面と与動的（意的）側面の二つがあることを確かめていく。そして、この二つのはたらきを通じて、心霊の最も著しい特性である



深澤助雄氏を迎えての研究会

「情」について言及する。

次に「〔13〕智情意」では、心霊の「知情意」という特殊なはたらきについて、近代の解剖学の成果を手がかりに解明していこうとするのであるが、この意義について、『哲学館講義録』では次のように述べている。

精神作用ト神経系統トハ極メテ直接ノ関係ヲ有スルコト他ノ諸機関ト同日ノ論ニアラサルコトヲ知ルニ足ル 故ニ心理学ヲ研究スルニ当リテハ神経系ノ構造作用ヲ知ルコト最モ必要ナリ 加之今日心理学ノ著シク進歩シタルハ解剖生理学特ニ神経系統ノ研究最モ発達セシニヨル者ト云ハサル可ラス
（第3巻167頁）

また「〔14〕三用ノ階級」では、「知情意」にそれぞれ段階があることを、日本において近代心理学の礎を築いた元良勇次郎（1858—1912）の『心理学』（1890年刊）の内容を援用しながら記述していることにも注意を払うべきであろう（第3巻〔心理学試稿〕参照）。

清沢が「試稿」を執筆した当時（1895年）、西欧における神経解剖学や心理学の研究は、日本において広く受容され、翻訳書や研究書が数

多く出版されていた。清沢は、それら最新の研究成果を採り入れながら、心霊について推究していたことが窺える。

さて清沢は、「[15] 心霊開発」において、そもそも心霊の開発とは、前述の「知情意」のはたらきが下等から上等へと進行することである、と明言する。そして、その具体相を実例を挙げて説明するのであるが、要するに心霊の開発・発展は、個々別々の物体や現象を統制して、同一の本源へと帰入させ、ついには最上で究極の本源、すなわち大覚に到達させる、と論じるのである。

これが、清沢における人間存在（有限心霊）の基本的理解であった。

■ 無限心霊への発展

次に清沢の考究は、有限心霊から無限心霊への発展・進達という課題へと移っていく。それが「[17] 無限無数」以降に展開される、いわゆる「神仏論」である。

「[18] 無神論有神論」「[19] 一神論多神論」「[20] 汎神論万有開展論」という項目が示しているように、清沢は西洋思想における無限（神の概念）に関する議論をいくつか取り上げて、考察を加えていく。

いま、その一つ一つの相違点を詳細に紹介することはできないが、ここで注目すべきことは、無神論・有神論・一神論・多神論・汎神論について、それぞれの主張に一理あると認めつつも、仏教の思想をそれらすべてを包摂するものとして捉えている点である。

万有ノ真理ハ其体無限ノモノナリ 之ヲ開
悟覚了セルモノハ各々皆無限タルナリ 之
ヲ比況スルニ彼ノ天上ノ月ニ対スル明鏡ハ
其数幾何アルモ皆各一月ヲ得ルガ如シ 万
有ノ真理其物一ナリト雖トモ之ヲ覚了スル
所ノ能者ハ无量无数不可計ナルコト毫モ通
シ難キ所ニアラサルナリ (第2巻61頁)

例えばこの文章は、一神論・多神論は事柄の二方面からの捉え方であり、それらはともに包含し合う理論であると述べているが、ここに、

仏教における「一如」と「衆生」の関係性を窺うことができるのではないだろうか。

清沢は、有限と無限の動的な関係、すなわち開発・発展について十分に表現しようとするならば、仏教書の言葉のなかに求めざるをえない、と言う。それは例えば、「草木国土悉皆成仏」や「色即是空、空即是色」という經典の言葉が教示しているように、有限存在（人間と事物）が、開発・発展という事情によって、無限と完全に一致しうることを証明することである。それを清沢は「万有開展論」と名づけて論証していこうとするのである。

■ 錐をもむような思索

前回の清沢満之研究会報告でも述べたことだが、「試稿」を読み進めていくにしたがって、清沢の透徹した理論構築のもと、他力仏教の学的課題が展開されていることが知られる。確かに、清沢の意図や文意が汲み取りにくい箇所もないわけではないが、論理の構成という観点から見れば、その道筋が首尾一貫して厳密に語られていることがわかる。

哲学者の深澤助雄先生は、このような清沢の学的姿勢について、清沢は何よりも厳格主義的な求道者であり、ある時期までの清沢は、^{きり}錐をもむようにして物事を考えていくというイメージがある、と述べておられた。また、清沢のような人物がなぜ出現したかについて、清沢は実存の比類なき典型であり、結局、日本人の生活倫理というものが、何百年もかけて日本仏教を培ってきたのであり、その一つが清沢というかたちで継承されたのではないかと指摘された。

近年、哲学思想の側からのアプローチによって、清沢が初期の論考を通して試行していた構想に光が当てられつつある。その成果に対して、仏教の側からいかに切り結んでいくのか。大切な課題が投げかけられているように思う。

※深澤助雄氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第11号（2006年12月1日号）に掲載予定です。

第 3 回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催 (2005年11月29日)

親鸞仏教センターでは、設立以来、毎月 1 回、東京国際フォーラム(有楽町)を会場に、公開連続講座「親鸞思想の解明」(浄土一濁世(じょくせ)を超えて、濁世に立つ)を開いている。第 42 回の講座では、前 2 回のシンポジウムで提起された、科学と宗教の対話の可能性を問うことが課題であるというを受け、「科学・哲学、そして宗教の間の対話を求めて—科学者は現代の状況に免責か?—」をテーマに、第 3 回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催した。

基調講演に國府田隆夫氏(物理学者・東京大学名誉教授)を、パネリストに斎藤勝治氏(株式会社放送衛星システム参与)を迎え、本多弘之所長を交えて、有識者やサラリーマンなど約 130 名の参加者と共に、3 時間半にわたって熱心な討議がなされた。

基調講演では、國府田氏(=写真上)から、まず「近代の「知」を三つ(処世知、専門知、叡智)に分けた上で、専門知の進展により人間は利便性を獲得した。しかし、科学技術の急激な進歩は、必ずしも人間生活の不安を解消するものとはならなかった。科学者は、専門知が招く負の事態に無責任ではない、有責任性を自覚すべきであろう」と述べられ、いままそ宗教と科学の対話の重要性を指摘された。続いて、パネリストの斎藤氏(=写真中)からは、科学を用いる実務者としての立場から、「科学技術の進歩なくして人類の発展はない。科学者の責務は真理の探究であり、その責務は放棄してはならない」と語られた。最後に、本多所長は「私たちの日常生活は、科学の恩恵の中にあるのは事実。しかし、仏教には(五濁悪世(ごじよくあくせ))の思想がある。人間が生きていくということは、それ事態、罪を作り続けているということである。だから、お互いに罪の深さを感じ合って生きていくということに、開法生活の大事な意味がある」と述べた。

引き続き開催されたパネルディスカッション(=写真下)では、休憩中に寄せられた聴講者からの質問や、約 15 名の助言者からの提言から、緊張感のある議論が展開された。誰もが科学技術の恩恵の中であって、しかし一方で、不安を生きながら生きることの意味を問いつづけねばならない。科学と宗教の対話がどこで成り立つのか、これからも「現代の課題」と「親鸞の思想」との接点を明らかにしつつ、課題の共有をめざしていきたい。



親鸞仏教センター研究員と読む「公開輪読会」のお知らせ

■釈尊——真理のことば(全 4 回)

担 当: 羽塚高照(親鸞仏教センター研究員)

テーマ:『ダンマパダ(法句経)』を読む

日 時: 2006年 3 月 1 日(水)(前 3 回は終了)

午後 6 時 30 分～8 時 30 分

■法然——念仏ひとつ(全 4 回)

担 当: 高 海史(親鸞仏教センター研究員)

テーマ:『選択本願念仏集』を読む

日 時: 2006年 3 月 8 日(水)、15 日(水)、22 日(水)、29 日(水)

いずれも午後 6 時 30 分～8 時 30 分

■親鸞——凡夫を生きる(全 4 回)

担 当: 伊東恵深(親鸞仏教センター研究員)

テーマ:『教行信証』『化身土巻』を読む

日 時: 2006年 4 月 5 日(水)、12 日(水)、20 日(木)、27 日(木)

いずれも午後 6 時 30 分～8 時 30 分

■申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料です(ただし、資料代等の実費はご負担ください)。定員 20 名。途中からの参加も可。

親鸞仏教センター公開輪読会 T 係

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

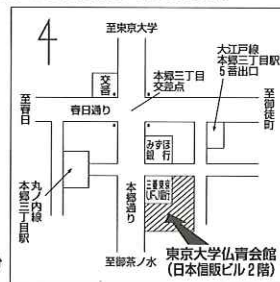
TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp

■会 場

東京大学仏青会館
セミナー室
(本郷三丁目・
日本信販ビル 2 階)



東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅徒歩 3 分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩 1 分

『アンジャリの会』(『anjali』個人購読)

入会者募集中!

『anjali』(合掌の意味・年 2 回発行)の個人購読を受け付けています。ぜひ、「アンジャリの会」にご入会いただき、ご購読ください。

◆年会費 1,000 円(送料込)

◆申し込みと問い合わせ

〒、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記までお申し込みください。

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T 係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

あ と が き

昨年(2005)の 12 月、広島県・栃木県で小学生の女児が殺害されるという痛ましい事件が起こった。心より哀悼の意を表するものである。この事件を受けて、法政大学教授の尾木直樹氏(本紙第 10 号に執筆)は、毎日新聞に「社会的弱者がより弱い子供にはけ口を求めている印象」(12 月 3 日夕刊)とのコメントを発表された。これを受けて記者は、「はけ口という言葉が悲しい……。同じ弱者でも、女児は保護されるべき弱者。おそらく大人の男性であろう加害者は、社会的弱者ではあっても女児を守るべき立場にある。それが、身を守る術(すべ)をもたない女児を攻撃する」と記した▼『anjali』第 9 号に「病みゆく子どもたち」を執筆いただいた夜回先生・水谷修氏は、この社会を「現在の私たちの社会は、人を認め合う社会ではなく、人と人とが責め合う社会、攻撃的な社会になっている」と言われ、大人たちのはけ口となっている子どもたちの眼に明日への輝きを取り戻されるときまで、私は聞くと訴えられる▼ひとりの人間を遥かに超えた社会全体の歪みが、もうすでに私たちにまで侵略している。『anjali』第 6 号に「子どもへのまなざし」を執筆いただいた東京大学大学院教授の佐藤学氏は、学校教育の鍵は、人間関係の「信頼」と「協力」であると訴え、校長先生の存在が最重要であるとしたうえで、「地域」—暮らしの臭いのする生活環境と、「子どもの声」—明るく元気な学校ではなく、子どもの声のやわらかさが学校全体を包むような、落ち着いて学べる場となること、と指摘される。闇の中に光を見る思いがした▼そう言えば、私が数年間住んだ都内の、数万人が居住するある高層団地群を思い出した。コンクリートで綺麗に整備された人工のこの街には、なぜか裏通りがない。だから、ぶらりと寄れるような赤ちやうちもない。大人子どもとも、人間は日向(ひなた)と日陰(ひかげ)をもって生きている存在である。街づくりは人間づくりにつながっていくように思えてならない。(長谷岡)